



佳作

書評 草野厚著

『ODAの現場で考えたこと—日本外交の現在と未来』

(日本放送出版協会 2010)

(中央開架 333.8/543/H/)

政治経済学研究科 博士前期課程1年 高須拓夢

本書は、慶應義塾大学の草野厚氏が ODA（政府開発援助）の実態を綿密なフィールドワークによって途上国側の視点で記したものである。ODA を取り扱った書籍というと、概して理論やミクロ・マクロ経済的アプローチによるものが多く見られる。しかし、その中であって本書は、筆者が実際に ODA 案件を見て回り、途上国にとっての「開発援助」という存在について書いている。

草野氏は元々、援助の専門家というわけではなく、外交やメディアといった分野を専門としている。だからこそ本書からは、筆者の援助に対する、我々と同じ様な素朴な興味・関心というものが見て取れる。

現在、日本の ODA 予算は経済・財政状態の悪化の影響から年々減少している。しかし、国民の ODA に対する無知が、援助への否定的な意見に繋がっているという現状もある。その原因は、マスメディアの特性からくる否定的かつ、途上国ゆえの不確かな報道というものもあげられる。

本書は、援助を案件の成否や国益という視点からのみ論じる風潮に一石を投じており、国民とメディアに対するアンチテーゼでもある。個別案件を平易かつ躍動感のある文体で書いている本書は、ODA を学びたい人々の入門書として、また援助を深く学んできた人にとっても新たな視座を与える著書となっている。

本書の冒頭は、インドへの案件視察の道中の風景描写から始まる。貧しさが残るムンバイやガンジス川の何気ない日常を匂い立つような文章で描写している事で、まるで小説を読むように、途上国の世界に一気に引き込まれる。

本書では、日本で失敗と報じられた案件を選択的に視察している。その案件の失敗理由はどこにあったのかという事に焦点を当てている。本書に記されている案件視察事例を読むと、途上国で援助をする事の困難さと、実施にあたる協力隊の人々の苦悩が見てとれる。援助物資が貧しい国民に行き渡る前に収奪してしまう汚職まみれた政府、援助慣れをおこし、怠惰になった人々。そこには、日本の文化という物差しでは測れない問題が山積している。これらの困難を乗り越え、なんとか貧困から救おうとする協力隊の人々の活躍には頭が下がる思いである。

我々は、筆者の様に案件視察をするという事は難しい。しかし多くの人々は、知らないままで ODA を容赦なく批判している。それは、恣意的で稚拙な報道により形成されたものである。この点に関して、筆者が実際の現場の状況を視察してみると、大きな違いがあるという事が本書で指摘されている。しかしながら、情報へのリテラシーを持たず、真偽を知ろうとする行動も起こさない事には、人々は画一的な情報に頼るしかなくなる。本書からは、物事の本質を知ろうともせず、否定をし、切り捨てるという国民全体の風潮に対しての、筆者の静かな怒りを感じる。本書は、ODA を知るための第一歩となるべきものであり、援助への興味を喚起するだけの上質な情報を提供してくれている。